

ラジオドラマ用オリジナルシナリオ

One Shot Story Series

「残り香の記憶（前編）」

作・牛

《キャスト紹介》

- | | | |
|------|-----|---|
| 男性客 | ・・・ | 年齢24才。営業マン。
地方人特有の素朴さ、純情さがある。
過去の女を探している。 |
| 女性客 | ・・・ | キャリアウーマン風都会っ子。
機知とユーモアがある。
好奇心旺盛。行動派。 |
| マスター | ・・・ | 女性バーテンダー。 |

《 舞 台 》

港が近くにあるBAR「サンドリオン」。
店内には常にジャズが流れている。

(PLAY-1)

S E ドアの開閉の音

マスター : いらしゃいませ。
女性客 : こんばんわ、マスター。
マスター : お久しぶりです。
女性客 : むし暑くなってきましたね。
マスター : そうですね。お飲み物は、何になさりますか？
女性客 : そうね、ジン・フィズをもらおうかしら。
マスター : かしこまりました。

S E ドリンクを作る音。

マスター : お待たせしました。
女性客 : ありがとう。(一口のみ) ああ、おいしい。
男性客 : (呟くように) 間違いない、この香り・・・
(感慨深げに) この香りだ・・・
(女性客に切羽詰まった感じで) すみません・・・
女性客 : はい？
男性客 : その香り、あなたがつけている、その今の香水・・・
女性客 : あら、ごめんなさい。ちょっときつすぎたかしら・・・
男性客 : いいえ・・・
女性客 : 失礼よね、やっぱりこういうお酒を頂く場所では。
男性客 : いや、そうじゃないんです。
女性客 : え？
男性客 : その香水の名前、教えてもらえませんか？
女性客 : それって、始めて会った女性を会話に誘う口実？
男性客 : (じれったい) いや、そんなんじゃありません。
僕はただ、その香水の名前を知りたいだけなんです。
女性客 : なーんだ。わたしにじゃなく、
わたしがつけてる香水に興味があるわけか。
男性客 : あ、ごめんなさい。失礼しました。
女性客 : そんな簡単に謝られると弱いだよ、わたしって。

マスター : 彼女がつけてる香りに、何かわけでもありそうですね。
男性客 : はい・・・

(PLAY-2)

男性客 : 自己紹介もしないで、変なこと聞いてしまって
申し訳ありません。僕は島田と言います。
女性客 : 冗談よ、気にしないでよ。判ってたわ。
でも、あまりにも表情が真剣だったから、つい。
あなたみたいに素朴で素直な人見たら、
からかいたくなっちゃうのよ。ごめんなさい。
男性客 : いいえ・・・
女性客 : わたしがつけてる香水の名前を知りたいのね。
男性客 : はい。
女性客 : プール・ムッシュって言うのよ。
男性客 : (囁み締めるように) プール、ムッシュですか。
女性客 : そう、シャネルから出ているの。
男性客 : シャネル。シャネルと言えば有名じゃないですか。
女性客 : ま、一応。
男性客 : じゃ、どうして見つからなかったんだろう・・・
女性客 : あなた、この香りを探していたの？
男性客 : そうなんです。
女性客 : 意味深ね。でも、間違いないの？
男性客 : ええ、臭いには敏感なんです。
でも、一応もっとよく確かめさせてもらえませんか？
女性客 : ええ、いいわよ。

S E バッグから香水入れを取出す音

女性客 : はい、どうぞ。
男性客 : こういう、入れ物に入ってるんですか？
女性客 : それはアトマイザーって、携帯用の容器よ。

あ、だめよ、直接手にかけちゃ。
貸してみて・・・香水ってのはね、
こうやって一度コットンに染み込ませて、
ワンクッションおいて肌につけるの。
その方が香りがソフトになるのよ。
それでそのコットンは洋服ダンスとかバッグに入れておくの。

男性客 : (感心して) へー。
女性客 : どう、その香り？
男性客 : ... うん、間違いない。この香りです。

(PLAY-3)

男性客 : でも、どうして有名ブランドなのに
判らなかったんだろう・・・
女性客 : それは・・・限定販売だったからよ。
男性客 : 限定販売！
女性客 : そう、数が限られた商品なのよ。
男性客 : (納得) あー、そうか。限定販売・・・
女性客 : 納得した？
男性客 : はい、しました。
女性客 : だったら、そのいきさつをよければ聞かせてよ。
男性客 : いきさつ？
女性客 : ええ、あなたがそんなにしてまで探し求めていた
プール・ムッシュのいきさつ。教えてあげたんだから、
聞かせてよ。
男性客 : (困る) はあー。
女性客 : 好きだった女性がつけてたんでしょ。
男性客 : はい・・・
女性客 : でもその女性はもういない。別れたんだ？
男性客 : 別れたというか・・・
女性客 : 振られたの？
男性客 : 振られたのかなあ・・・
女性客 : とにかくいなくなったんだ。
でも、もう1度会いたいから探してる。

男性客 : そうなんです。
女性客 : いつから？
男性客 : 3年前です。
女性客 : つき合っていたの？
男性客 : 3ヶ月間暮らしていました。
女性客 : 暮らすぐらいなら、香水以外にも色々手掛かりがあるでしょ。
男性客 : それが、名前以外は知らないんです。

(PLAY-4)

男性客 : 僕がまだ大学生で神戸に下宿していたときでした。
僕は実家が愛媛の三沢というところで、
今の勤めも地元市内なんです。
女性客 : じゃわざわざ探しに来てるわけ？
男性客 : いいえ、出張です。
大阪神戸にうちの会社は出張が多くて、
今回も1週間の滞在なんです。
それで神戸に来る度にこういう彼女が好きそうなお店を・・・
女性客 : そう・・・
男性客 : 彼女との出会いはほんと偶然のようなものでした。
アルバイトをして帰りが遅くなった晩、
夜道に彼女が立っていたんです。
その様子が今にも何か消え入りそうで、
もの哀しかったから・・・
女性客 : それで声を掛けてあげたの？
男性客 : ええ、それまで田舎者の僕なんか、
知らない女性に声を掛けたことなんか1度もなかったけど、
そのときは妙に自然と出来たんです。
それで、近くにあった喫茶店に二人で入りました。
でも、僕は何を喋ったらいいのか判らなかった。
そこで僕が知ったのは、彼女が霧野静という名前で、
僕より3つ年上だということでした。
女性客 : 霧野静さん・・・それでどうなったの？
男性客 : 彼女は帰る所が無いと言うもんだから・・・

女性客 : あなたのお部屋に誘ったのね。
男性客 : 誤解しないでください。変な気はなかったんだから。
 僕は友達の下宿へ泊まりに行こうと思ってました。
女性客 : ほんとうかしら？
男性客 : ほんとうです！・・・
 (言いにくそうに) だって、僕はまだその時、
 その、女性経験が無かったですから、
 そういう時の対応能力に自信が無かったんです。
女性客 : (吹き出す) 対応能力ね、じゃあなたは紳士的すぎる態度で、
 その可哀相な彼女に部屋だけを提供してあげたのね。
男性客 : いいえ。
女性客 : え？
男性客 : 彼女と夜を過ごしました。
 彼女が、彼女と一緒にいてほしいって言ったものですから・・・

(PLAY-5)

男性客 : その後彼女は、僕の部屋にしばしば来るようになりました。
 気がつけば洋服ダンスの服が、僕より多くなってました。
女性客 : ふうん。
男性客 : 僕にとって彼女は大人の女性としての魅力が充分ありました。
 容姿だけでなく、性格、話し言葉、経験すべてが。
女性客 : 年上の女性の魅力か・・・
男性客 : 彼女と暮らすようになって、
 自分が変わっているのがはっきり判りました。
 最初は気後れしていたのですが、
 だんだんと自分の自信となって、
 これまで割と消極的だった性格も積極的な方へ。
 外見も彼女に言われてお洒落をするよう
 になったら、女友達も出来るようになりました。
女性客 : 男も女次第で変わるか・・・
男性客 : 彼女は僕の自慢でもあり、
 もうかけがえのない人になっていました。でも・・・
女性客 : でも、どうしたの？

男性客 : でも、いつもとても不安だったんです。
女性客 : なぜ？
男性客 : 彼女と僕はとても不釣り合いだった。
彼女は魅力ある大人の女性、僕は社会経験もない子供でした。
周りも言ってたし、自分でも感じてました。
それに彼女は、自分の身の上話をあまりしてくれませんでした。
だからいつも一緒にいる自分の彼女という感覚はなく、
とても存在自体が不思議で、不安だったんです。
女性客 : なるほどね。
男性客 : そして僕の不安通り彼女は、
突然に僕の前からいなくなりました。
ある日大学から帰ってみると、彼女の身の回りの物が
全て部屋から無くなっていたんです・・・
女性客 : 形の無い、その香りだけを残して・・・
男性客 : もう探しても見つからないと直感的にそう思いました。
そう思いながらも、気がつけば僕は街を彼女を
探してさまよい歩いていました。

(PLAY-6)

女性客 : プール・ムッシュの香りだけを残して去って行った女か、
香水は間違いないのね？
男性客 : それは絶対自信があります。
女性客 : どう思いますマスター。
マスター : 捜し出すにはちょっと手だてが少なすぎますね。
男性客 : はい・・・
女性客 : 手掛かりは名前が霧野静ということと、年齢が今じゃ・・・
男性客 : 27、だと思います。
女性客 : 他には？
男性客 : とくには・・・
女性客 : お勤めなんかは？
男性客 : 僕と一緒にいる間は働いていた感じはありませんでした。
マスター : でも・・・
女性客 : なんですか、マスター？

マスター : その彼女のお名前が、少し気になりますね。
女性客 : マスターもそう思ってました。
マスター : ええ。
男性客 : どういう事ですか？
女性客 : ひょとして捜し出せるかもしれないわよ。
男性客 : 本当ですか！？
女性客 : 実際捜し出す事はわたしには出来ないから、もしよければ
探偵さんをご紹介するわ。
男性客 : 探偵・・・
女性客 : わたしの従兄弟が私立探偵をしているの。
男性客 : お願いします。
女性客 : 神戸の滞在はいつまで？
男性客 : 1週間です。
女性客 : 見つからなくても気を落とさないでね。
男性客 : お願いします。

つづく